

## 第18回 ノヴォシビルスクから片想い？

皆様には、「食わず嫌い」ならぬ「行かず嫌い」の国があるだろうか？

私にとってロシアがまさにそれだった。正確に言えば、行ったことはあるが入国してはいない。昔、ロシアがソ連だった頃、貧乏学生だった私はアエロフロートのトランジットでモスクワの空港によく立ち寄ったし、トランジットホテルに2度泊まったこともあるが、入国していないので、自由に歩くことも、ホテル外のロシア人と触れ合うこともできなかった。その頃の暗いソ連の印象が強烈だった上、最近の政治的言動からロシアを敬遠しており、今回のロシア取材の話も大変気が重かった。ヴィザの申請書作成で立ち往生した時など、承諾したことを後悔した。その上、行き先はサンクトペータースブルグでもモスクワでもなく、ノヴォシビルスク！子供の頃世界地図でシベリアのド真ん中に名前を見つけたことがある程度の認知度の街である。

ところが、いざ行ってみると、現地人の「故郷を愛する情熱」と「旅人歓迎の心」にもてなされた。

その昔、神童として世界を風靡したバイオリニストのヴァディム・レーピンも40歳を過ぎ、故郷のノヴォシビルスクを世界にもっと知ってもらいたい、と芸術祭を立ち上げた。音楽界で知り合った大切な仲間達と故郷で集いたいという思いもあったという。ノヴォシビルスクはシベリア鉄道建設中に整備された街であるが、この芸術祭もシベリア鉄道のように、東と西を結ぶ役割を担いたいと、「トランス＝シベリア芸術祭」と名付けられた。3年前の第1回芸術祭はノヴォシビルスクで始まり、第2回はシベリアの他の都市も回るようになった。そして第3回の今年は、4月26日にエカテリンブルクでメインフェスティバルが終わると、5月にイスラエルへ、6月に韓国と日本へツアーに出るまでに成長した。その機会を最大限に活かすため取材に招かれたのだが、来年は、オーストリア、イタリアなど西ヨーロッパへの進出を模索しているそうなので、期待したい。

実は日本へツアーで行かれるようになることは、この芸術祭を立ち上げた動機の一つにもなっていると、レーピン氏はインタビューで話してくれた。彼は大の日本好きで、今年もトランス＝シベリア芸術祭日本ツアーの直後、マルタ・アルゲリッチ音楽祭でも再来日するのが楽しみだという。そんな大好きな日本へもっと行かれるようになるため、この芸術祭第1回目から日本を意識し、信頼する友人の指揮者の中でも日系のケント・ナガノ氏を選んだとまで言われると嬉しくなるではないか。今年のプログラムの中にも、昨年の芸術祭に登場して皆を驚愕させた15歳のバイオリニスト服部百音、コレオグラファー＆ダンサーの下川まなほの2人の日本人が参加していた。

ノヴォシビルスクは札幌と姉妹都市であり、かの地には北海道文化センターというものが存在する。取材に行ってみると、日本的な形の建物が遠くからそれと判る構えで、入り口では日本庭園が訪問客を招き入れてくれる。中に入ると、完璧な日本語を話すロシア人女性が出迎えてくれた。そして副館長、さらにもう1人、と3名共甲乙付け難い流暢な日本語を操るのだ。丁度姉妹都市写真展が開かれていたが、それ以外にも子供の目線で日本の文化を体験できる部屋や、日本語講座の教室、書道の部屋などが並ぶ。廊下にはシベリアから引き上げた日本人が御礼に置いていったというヤマハのピアノが綺麗に修復され、友情の印として飾ってある。この文化センターは市政がサポートしているため、希望者は破格の値段で日本語講座を受けられるという。独自で開発したという

学び易そうなテキストを使い、先生もはるばる日本から派遣されている。子供の時に、この文化センターで日本文化に触れ、日本好きになり、大人になってから日本語講座に通い出すという人も多いという。こうして日本好きなノヴォシビルスク市民がどんどん輩出されているのである。これはもう、片想いで終わらせては申し訳ない気がする。

まるで遠縁の家に寄ったかのような歓迎を受けたが、このウエルカム精神はシベリア鉄道と無関係ではないだろう。鉄道がすたれた後も、第二次世界大戦を経て、一都市集中型の開発は危険だと悟ったソ連政府が、国の研究機関などを発展させるために、ノヴォシビルスクの開発に力を入れ、新しく生まれ変わった街なのだという。その新しい誇りが、故郷を愛する情熱を保ち続けている原動力となっているのであろう。街中は整備されていない道路や壊れたままの建物等が多く目につき、必ずしも裕福な街とは言えないが、その中に堂々と佇む美術館やオペラハウス、そして3年前に出来上がった新しいコンサートホール、アーノルド・カツホール等が、文化への意識の高さを感じさせる。「人は食べるために生きている訳ではない」というソ連時代の精神に則って、金銭的な裕福さよりも精神の贅沢を優先しているのだという。

話題を音楽に戻そう。今年はロシアを代表する作曲家、プロコフィエフ生誕125周年記念イヤーということで、オールプロコフィエフのプログラムが組まれ、ロシア人によるロシア音楽を堪能できた。また、ノヴォシビルスクという街の性格でもあるという教育に重点を置いたプログラムとして、『子供のための子供のコンサート』というものがあり、13歳のイスラエル人チェリスト、14歳のアゼルバイジャン人指揮者、15歳のロシア人ピアニストと聴きながら、彼らの成熟したテクニックと音楽を渴望する姿勢に驚かされた。

そこに白いジャケットの男性が登場し、朗々とセミクラシックを歌い始めた。彼はソ連時代の国民的歌手ポラド・ビュルビュルリグで、現在はアゼルバイジャン大使なのだという。14歳の指揮者は、実は彼の息子であった。父親の作ったオーケストラ伴奏のソ連版演歌を堂々とした棒さばきで聴かせた。私を始め外国人ジャーナリストは多少違和感を感じて引いたが、聴衆は体でリズムを取りながら、一団となってノリまくっていた。中には3世代が皆踊りながら口ずさんでいた家族もいた。これこそロシアの音楽的エネルギーなのだろう。

ロシア経済の低迷は周知の事実だが、彼らはめげずに人生を謳歌している。ノヴォシビルスクから車で2時間半ほど走ったIskitimという街のコンサートでは、トイレトペーパーが硬い灰色の紙なのには驚いたが、それでもホールやその後の打ち上げでは心のこもったビュッフエでもてなされ、人間の豊かさとは何かと再度考えさせられた。シベリアからのラブコールは、確かに私には届いたようだ。そしてスイスへのツアーが実現した暁には、是非皆様も覗いてみていただけたら幸いです。

近頃パワーのない自分を周りの環境のせいにしてあきらめてしまう方は、以下の処方箋をお試し下さい。ロシア人の底力と日本への愛を感じられるかもしれません。

### トランス＝シベリアフェスティバル

<http://2014.transsiberianfestival.com>

### ヴァディム・レーピン お勧めのCD (ドイツグラムフォンより)

ラン・ラン、ヴァディム・レーピン、ミシャ・マイスキーのチャイコフスキー作曲ピアノ三重奏op.50、ラフマニノフ作曲 悲しみの三重奏 第1番

### ポラド・ビュルビュルリグ

[www.youtube.com/watch?v=awvHlzOlwiY](http://www.youtube.com/watch?v=awvHlzOlwiY)

